

ハイデガー研究における分析哲学の受容史とその舞台裏

山崎 諒 (慶應義塾大学)

The Acceptance of Analytic Philosophy in Heidegger Studies

— *Its History and Behind-the-Scenes Events*

Ryo YAMAZAKI

It is well-known that M. Dummett once likened the two streams of “phenomenology” and “analytic philosophy” to the “Danube” and the “Rhine.” Today, these two are often known as the opposing streams of contemporary philosophy and are sometimes seen as fundamentally opposed. However, a good deal of research has accumulated on both.

Of course, the value of such bridging studies, and whether they are even possible in the first place, is a question that needs to be debated. Nevertheless, even if this is the case, the history of the exchange between “phenomenology” and “analytic philosophy” should not be hastily dismissed. With this in mind, this study attempts to give a partial overview of such exchanges’ history and reveal what might be called “behind-the-scenes” information. The West Coast of the United States was the site where “analytic philosophy,” “Husserl studies,” and “Heidegger studies” were closely intertwined.

This study will proceed as follows, showing how the interpretations of H. Dreyfus, a prominent American scholar of Heidegger, are connected with analytic philosophy and interpretations of Husserl.

(1) As the historical source of the debate on the problem of “reference” in analytic philosophy, W. V. O. Quine’s criticism of quantified modal logic and D. Føllesdal’s response to it will be reviewed.

(2) It will be shown that Føllesdal formulated the “West-Coast Interpretation” in Husserl’s studies with the problematic area of (1) in mind and that Dreyfus based his interpretation and criticism of Husserl on it.

(3) Dreyfus’s interpretation of Heidegger will be examined, and the reason for placing it in the flow of (1) and (2) to understand it will be highlighted.

Keywords: reference, transparency/opacity, Føllesdal, Dreyfus, West-Coast interpretation
キーワード: 指示、透明性／不透明性、フェレスダール、ドレイファス、西岸解釈

はじめに

かつてM・ダメットが、「現象学」と「分析哲学」と呼ばれるふたつの流れを「ドナウ川」と「ライン川」に喩えたことはよく知られている¹。そして現在、しばしば現代哲学において相対立する二大潮流として知られ、ときには根本的に対立すると見られることもある両者にかんしては、それでもそれなりの研究が蓄積されてきていると云える。

もちろん、こうした架橋的な研究にどれほどの価値があるのか、あるいはそもそも可能なのかといったことについては議論が必要となるだろう。とはいえ、たとえそうだとすも、それなりに蓄積されてきた「現象学」と「分析哲学」の交流を一振り払いのけるべきではないように思われる。こうした意識のもと本稿が試みるのは、そうした交流の歴史を部分的に概観し、いわばその「舞台裏」とでも云うべきものを明らかにすることである。とりわけ本稿は、アメリカ西海岸における交流に焦点を当てることにしたい。アメリカ西海岸はまさに、「分析哲学」・「フッサール研究」・「ハイデガー研究」の三者が密接に絡みあった現場だったのである。

本稿の以下の部分は、具体的にはつぎのような手順で議論を進めていく。そしてそれによって、アメリカにおけるハイデガー研究の大家であるH・ドレイファスの解釈が、どのように分析哲学ならびにフッサール解釈と結びついているかを示すことにしたい。

まず第1章では、分析哲学における「指示」をめぐる問題の歴史的源泉として、W・V・O・クワインが量化様相論理学に向けた、「指示の透明性／不透明性」にまつわる批判と、それにたいするD・フェレスダールの応答があったことを示す。このフェレスダールこそ、アメリカ西海岸における分析哲学と現象学の交流におけるキー・パーソンであり、彼のフッサール解釈は、ドレイファスのフッサール解釈ならびにハイデガー解釈に甚大な影響を与えているのである。

第2章では、そのフェレスダールのフッサール解釈を検討し、しばしば「西岸解釈」や「フレーゲ的解釈」とも呼ばれる当該解釈の背後に、第1章で見た問題意識が存在していたことを示す(第1節)。そのうえで、ドレイファスがそうしたフェレスダールのフッサール解釈を引き受けたうえで、知覚作用すら「不透明」にならざるをえないフッサールにたいして、「表象主義」という批判を加えていることを確認する(第2節)。

第3章では、これまでの議論を踏まえ、ドレイファスのハイデガー解釈を検討する。それによって、日常性についての「デフレ的実在論」と非日常性についての「頑強な実在論」というドレイファスの解釈の骨子が、フェレスダールの影響のもと、言語的な指示の問題との関連で提示されていることが示されるはずである。

最後の「おわりに」では、本稿のまとめをしたうえで、本稿をもとに見込まれる事柄について若干触れることで締めくくりとしたい。

¹ Cf. Dummett (1993), 24.

1. 「指示」の問題 —クワインからフェレスダールへ

分析哲学においていわゆる「指示」をめぐる問題が活発化しはじめた時期として、1970年代を挙げることができるだろう。そこでは、伝統的な「記述主義」に抗して「単称主義」が、S・クリプキやK・ドネラン、D・カプランらといった論者によって（改めて）展開されていったのである。しかし、そうした（いまでも取り沙汰される）議論の歴史的な淵源には、おおよそ1950年代を中心にクワインが繰りひろげた量化様相論理学への批判が存在しており、さらにまた（クリプキとも知己のあった）クワインの高弟フェレスダールによる、当の批判への応答の試みが存在していたと云える。とくにフェレスダールにとって、クワインによる批判は深刻に受けとめるべきものだったのであり、それゆえ、その後のフッサール解釈においても継続される問題意識を形成するものであったと思われるのである。

さて、クワインによる量化様相論理学への批判は、「指示の透明性／不透明性 (referential transparency/opacity)」にまつわるものであると云える。その骨子は、様相的な文脈が「普遍的代入可能性」の成り立たない（つまり、ある文に含まれる表現を同じ指示対象をもつ別の表現で置き換えても、真理値が保存されるとはかぎらない）「指示的に不透明」なものであり、それゆえ、そういった文脈内部への量化が意味をなさないということにある²。たとえば、必然性のオペレータとして「□」を用いるなら、「惑星の数」と「8」は指示対象が同一であるにもかかわらず、つぎの(1)と(2)は真理値が異なっている。

- (1) □ (惑星の数 > 7)
- (2) □ (8 > 7)

すなわち、(1)は（太陽系の歴史が別の歩み方をした可能性がある以上）偽であるのにたいして、(2)は真であるように思われる。それゆえ、この文脈は普遍的代入可能性が成立しない指示的に不透明な文脈だということになる。このとき、たとえば(2)にたいして「存在汎化」を適用して得られるつぎの(3)は、どのように理解できるだろうか³。

- (3) ∃x □ (x > 7)

ここで7より必然的に大きいとされているものは、存在汎化をかけるもとになったものが(2)であることを踏まえれば「8」であり、それゆえ(3)は真になる。とはいえ、惑星の数もまた8なのだから、惑星の数が7よりも必然的に大きいことになってしまう。すると、それは(1)が偽であることと衝突してしまう。それゆえ、このように指示的に不透明

² Cf. Quine (1980), Ch. 8. 以下の梗概は飯田 (1995), 42 ff. を参照にしている（ただし、惑星の数は9ではなく8に変えてある）。なお、飯田自身が同書の文献案内で明言していることだが、当該部分での飯田のまとめは、フェレスダールを参照したものになっている（cf. 飯田 (1995), 368 f.）。

³ 「存在汎化 (existential generalization)」とは、「Fx」から「∃xFx」に移行する妥当な推論の一種である。

な様相的文脈の内部への量化は意味をなさない——クワインはそのように考え、量化様相論理学は意味をなしないと結論づけたのである。

さて、フェレスダールが1961年にハーヴァードのクワインのもとで提出した博士論文は、『指示の不透明性と様相論理学』(*Referential Opacity and Modal Logic*)というタイトルであり、フェレスダールは同論や同時期の他の論文で、クワインが量化様相論理学に加えてきた批判にたいして、「指示」にかんする観方を根本から変えることで応答している⁴。ここでまず指摘しておくべきは、フェレスダールがクワインの批判を深刻なものに見なしているということである。つまり、この批判は論理的な様相のみならず、あらゆる非外延的な文脈に適用される壊滅的なものなのであり、それゆえ、フェレスダールからすれば、そういった文脈についての理論を組み立てるには、クワインの批判に応答することが是非とも必要となるのである⁵。それゆえにこの件は、後に見るように、フェレスダールがフッサールを解釈するさいにも勘案すべきものになっているのであり、そしてその姿勢は、紆余曲折を経つつドレイファスのフッサール解釈やハイデガー解釈にも受け継がれているのである。

フェレスダールは、「量化が意味をなすには、変項の位置が量化子の後にくる文のなかで指示的になっていなければならない、おなじ対象を指示する名前は、そうした位置で交換可能になっていなければならない」というクワインの所見を、「クワインのテーゼ」として受けいれている (Føllesdal (1968), 148)。フェレスダールは、クワインにたいする当時の諸反論 (カルナップ、ヒンティッカなど) を検討したうえで、当該テーゼを否定する試みがすべて失敗に終わってきたと結論づける。そこでフェレスダールの課題となるのは、「当のテーゼを受けいれたうえで、なおクワインの悲惨な結論を回避する方法を見つけること」だとされる (Føllesdal (1968), 151)。

クワインの指摘するような問題が生じてくる一因は、様相的な文脈において「惑星の数」のような確定記述句と「8」のような名前のふるまいを同一視し、「指示的に透明／不透明」という基準を両者にまったく同様に適用していることだと考えられる⁶。それゆえ、上記の課題を果たそうとするフェレスダールは、そもそも「指示」についての観方を改めなければならないと考え、そして、伝統的な「一種意味論 (one-sorted semantics)」にたいする「二種意味論 (two-sorted semantics)」を打ち立てることになったのである。

クワインの議論を吟味することでわかったのは、そこから抜けだす何か他の手立てなどほとんどないということである。フレーゲやカルナップの巧妙な一種意味論を放棄し、単称名辞が一般名辞や文とは根底的に異なったふるまいをする二種意味論をとらなければならないのである (Føllesdal (1961/2004), xii)。

⁴ フェレスダールの博士論文がクワインによって高く評価されているものであることは、『論理的観点から (*From a Logical Point of View*)』第二版の序言において、同版での改訂の主要因として同論が名指しで挙げられていることから窺える (cf. Quine (1980), vi)。

⁵ Cf. Føllesdal (1961/2004), Føllesdal (1986)。

⁶ ラッセルの記述の理論以来、「惑星の数」のような確定記述句を、「9」のような名前と同等に扱ってよいということは自明ではない (cf. 飯田 (1995), 58)。

伝統的な一種意味論においては、「Sinn が Bedeutung を決定する」という原理が、「単称名辞」、「一般名辞」、「文」のすべてに同列に適用されることになる。それゆえ、フェレスダールの診断では、そのような意味論をとるかぎりにはクワインの批判を躲すことはできない。それにたいして、二種意味論においては、単称名辞とそれ以外の表現の意味論的なふるまいが区別されることになる。フェレスダールにとって、名前は「純正単称名辞 (genuine singular terms)」であり、その Bedeutung は Sinn によって決定されているわけではない。「ある対象について何ごとかを述定するためには、いかなる述定をも明白に使うことなく当の対象を指示することができなければならない」(Føllesdal (1986), 101)。そうした「純正単称名辞」は、(対象が存在する) あらゆる可能世界で当該の対象を指示する表現である⁷。そしてこの場合には、純正単称名辞における「指示の透明性／不透明性」と、それ以外の表現における「外延の透明性／不透明性」が区別されることになり、クワインが問題にしていたような様相的文脈は、「指示的な透明性」と「外延的な不透明性」の組合せとしてうまく処理されることになる⁸。それゆえフェレスダールは、以上のように「一種意味論」ではなく「二種意味論」を採用することによって、量化様相論理学が意味をなすようにできると結論づけるのである。

そして、以上のようなフェレスダールの議論は、その後の分析哲学の伝統のなかで一大トピックとなる、指示にかんする「記述主義 (descriptivism)」⁹にたいする「単称主義 (singularism)」¹⁰の台頭 (ないし復活) の先駆けになっていると云える¹¹。とくにフェレスダールの「純正単称名辞」は、クリプキがその約 10 年後に提示した「固定指示子 (rigid designators)」に先立つものになっていると云えるのである。そして、こうした「記述主義」と「単称主義」の対立の核心は、「人間はいかにして対象とかかわるのか、という極めて原理的かつ壮大な問題関心」なのであり (成瀬 (2016), 22)、また、「大雑把に云えば、20 世紀の言語哲学と心の哲学の歴史は、単称主義と記述主義のあいだの論争を中心にまわってきた」とすら云われることがある (Recanati (2012), 5)。本章で辿ってきたように、フェレスダールはそのような論争の初期の重要人物となっているのである。しかも、これから見ていくように、そういった知的伝統に参与していたフェレスダールは、ここで触れた問題意識

⁷ Cf. Føllesdal (1961/2004), 75, 120 ff.

⁸ Cf. Føllesdal (1961/2004), Ch. 1, Føllesdal (1968), 204 f.

⁹ クリプキが「フレーゲ＝ラッセルの見解 (Frege-Russell view)」と呼んだことからこの名前が使われることも多いが (cf. Kripke (1980), 27)、それ以降フレーゲを再解釈する「新フレーゲ主義」が別の立場として登場していることも踏まえて、ここでは「記述主義」という名称を採用しておく。また、こうした「記述主義」を洗練させた立場の擁護者として、J・サールが挙げられる (cf. Searle (1958))。

¹⁰ こうした動向は「直接指示の理論」や「新しい指示の理論」とも呼ばれるが、場合によってはこれらの名称はミスリーディングなものとなりうることを指摘しておく (cf. Devitt (1989), Recanati (2012), Ch. 1)。また、しばしば「第二世代」とも呼ばれる論者として、H・ウェットスタイン、J・アルモグ、N・サーモンといった「新ラッセル主義」と呼べる一派がいるほか、J・マクダウェル、G・エヴァンズ、F・レカナティといった「新フレーゲ主義」と呼ばれる論者たちも存在する。とくに「新フレーゲ主義」については、現象学の領域 (フッサール解釈、ハイデガー解釈) においてもその知見を活用しようとする論者がいることは特筆に値するが、本稿では扱うことができない (cf. 荒畑 (2009a), (2009b), Beyer (2000), 成瀬 (2015))。

¹¹ 「指示の問題」をめぐる概説としては、たとえば、Devitt (1989), Lycan (1999), 飯田 (1995) を参照せよ。とくに Devitt (1989) は、混同されがちな「単称主義」の諸主張を整理・批判するものであり、啓発的なものである。

を携えてフッサールを解釈しており¹²、その解釈が、ドレイファスのフッサール解釈・ハイデガー解釈に決定的な影響を与えているのである。

2. 西海岸のフッサール研究者 ——フェレスダールからドレイファスへ

前章で見たような分析的な知的伝統に属していたフェレスダールは、アメリカ西海岸における現象学受容におけるキー・パーソンでもあり、とりわけ、いわゆる「ノエマ論争」における「西岸解釈」ないし「フレーゲ的解釈」を提唱した人物として、大きな影響力をもっていた¹³。そこで本章では、フェレスダールのフッサール解釈ならびに、それに強く影響を受けたドレイファスのフッサール解釈を辿っていく。それによって、フェレスダールのフッサール解釈が前章で取りあげた事柄と結びついたものであること、そして、ドレイファスのフッサール解釈(これがドレイファスのハイデガー解釈の前提になるのだが)が、それを踏まえたうえで施されているということが示されるはずである¹⁴。

(1) フェレスダールのフッサール解釈

フッサールのいわゆる「西岸解釈」にとって記念碑的とも呼べる論文は、1969年にフェレスダールが著した「フッサールのノエマ概念 (Husserl's Notion of Noema)」だと云えるだろう。フッサールのノエマ概念にかんするテーゼを12個提示する同論文は、たった8ページしかないものの、それ以降歴大な議論を巻き起こしていくことになった。その主張を簡潔にあらわせば、フッサールの「ノエマ」はフレーゲの Sinn を言語的な作用からあらゆる作用へと拡張したものであり、志向性が向かう「対象」とは存在論的に区別される「内包的存在者」であって、意識はこうしたノエマに媒介されることで対象に関係することができるのだ、と云うことができる。

とはいえ本稿では、主として1972年に公刊された論文「分析哲学者のための現象学入門 (An Introduction to Phenomenology for Analytic Philosophers)」を参照していくことにしたい。というのも同論は、公刊自体は1972年であるものの、元になった連続講義は1962年のもの

¹² 本稿では触れることが叶わないが、博士論文以降のフェレスダールは指示の問題にかんして(私見ではフッサールの影響を受けながら)「指示の規範説 (the normative view of reference)」という独自の観方を展開していくことになる (cf. Føllesdal (1986), Føllesdal (1997))。

¹³ Cf. Yoshimi, Tolley & D. W. Smith (2019). フェレスダールの影響圏にはたとえば、H・ドレイファス、D・W・スミス、R・マッキンタイア、T・カーマンらといった研究者たちが含まれている。また、ダメットも『分析哲学の起源』のなかでフェレスダールの解釈を参照している (cf. Dummett (1993), Ch. 7)。

¹⁴ 本稿では、フェレスダールとドレイファスの解釈や両者の関係のすべてを詳論することはできないし、また、それ以外の重要人物 (D・W・スミス、R・マッキンタイアなど) についても十分に触れることができない。とはいえ一言触れておけば、しばしばそう想定されるのと違って、「フレーゲ的解釈」は一枚岩的にフッサールに「記述主義」を帰する教条集団なのではない。たとえばD・W・スミスやマッキンタイアは(最終的にフッサール現象学全体と相容れないものであると判定を下すことにはなるが)、フッサールのなかに明らかに「単称主義」の要素を見てとっている (cf. D. W. Smith & McIntyre (1982), McIntyre (1982), D. W. Smith (1982))。とくにD・W・スミスは、『論理学研究』における「本質的に偶因的な表現」に着目し、それがカプランによる「指標辞」の分析に類似したものであると主張している (cf. D. W. Smith (1982), see also D. W. Smith (1981))。

のであり、博士論文提出(1961年)後のフェレスダールのフッサール読解としては、最初期のものにあたるからである¹⁵。また、以下で見ていくドレイファスが、フェレスダールのもとでフッサールの知覚論にかんする博士論文を仕上げたのは1964年のことであるため¹⁶、フェレスダールの当該論文は、ドレイファスのフッサール解釈を見ていくうえでも有益であると思われる。

同論でのフェレスダールはまず、布伦ターノの志向性理論が抱えるつぎのような「ジレンマ」を指摘する。一方で、「木を見る」という作用が向けられている「対象」が眼前にある実在的な木であるとする、それは幻覚を説明するさいに困難を孕むことになるが、他方で、作用の対象についての説明を幻覚も含むようなかたちで修正すると、つぎのように云わなければならない。「私たちが木を見ているときに見ているのは、眼の前にある実在的な木なのではなく、幻覚に陥っていたとしても見られていたような、何か別のものである」(Føllesdal (1972), 419)。フェレスダールいわく、こうしたジレンマは、師の対応に満足しなかった布伦ターノの弟子たちにとっての解決課題だったのであり、フッサールもまたそのうちのひとりだったのである。

そしてフェレスダールは、そのためにフッサールがとった方策は、「ノエマ」と「対象」を区別することであり、そしてこの方策は、フレーゲが空名の有意味性を説明するために Sinn と Bedeutung を区別したこととパラレルだと主張する¹⁷。すなわち、意識の志向性にとって対象の実在は必要ではなく、志向的であるということは「端的にノエマをもっているということ」なのである (Føllesdal (1972), 422)。そしてフェレスダールは、フッサール自身の発言に依拠しつつ、ノエマは意味という発想をあらゆる作用領域へと一般化したものに他ならないと述べるのである¹⁸。

さて、ここで重要なのは、フェレスダールが同論で以上のようにフレーゲとフッサールを結びあわせるとき、前章で見た「指示の不透明性」の問題が双方にかんして指摘されていることである。というのも、空名の有意味性や件のジレンマを解決するために、Sinn と Bedeutung ないしノエマと対象の区別を導入することには、そして、Sinn が Bedeutung を決定するという「一種意味論」の原理を帰することには、不透明な文脈の処理という課題が突きつけられることになるからである。そしてフェレスダールは、フッサール現象学について、つぎのように述べているのである。

現象学者が正しいとしたら、私たちはたくさんの文脈をこのリスト〔不透明な文脈のリスト〕に加えることができるし、結果的には、すべての作用文脈が含まれることになるだろう。というのも、たとえば〈見る〉はフッサールにとって作用であり、「トムは空けの明星を見る」という文は、ある作用の現象学的な記述と見なすのであれば、「明けの明星」という名前を同じ指示をもつ別の名前と交換すると、真理値が変わることもあるかもしれないからである。〔…〕作用文脈が、この

¹⁵ フェレスダールのフッサールならびにフレーゲへの関心は、博士論文よりも遡るものである。フェレスダールは修士論文で、フッサールとフレーゲの関係を心理学主義批判という観点で扱っている (cf. Føllesdal (1994))。

¹⁶ Cf. Yoshimi, Tolley & D. W. Smith (2019), 369.

¹⁷ Cf. Føllesdal (1972), 421.

¹⁸ Cf. Føllesdal (1972), 422, Føllesdal (1969), 681.

ように「不透明」であるという特徴をそなえているということは、現象学的な知覚理論にとって根本的なことである (Føllesdal (1972), 422 f.)。

同論でのフェレスダールは、こうしたことを指摘するに留めているものの¹⁹、フェレスダールのフッサール解釈の背後にやはり「指示の不透明性」をめぐる問題が存在しているということは、この時期にフェレスダールの指導を受けていたドレイファスにとっても非常に重要だったと考えられる。というのも、ドレイファスはフェレスダールの解釈を引き受けたうえで²⁰、それをいわば認識論・形而上学の問題としてさらに拡張し、フッサールにたいして批判を加えているからである。

(2) ドレイファスのフッサール解釈

ドレイファスによる公刊著作のなかで、初期のフッサール解釈ならびに批判が比較的良好と見てとれるのは、1982年の「フッサールの知覚ノエマ (Husserl's Perceptual Noema)」という論文である。そこでドレイファスは、フェレスダールのフレーゲ的なフッサール解釈を引き受け、「フッサールがフレーゲの分析に加えた変更は術語上のものでしかなかった」とまで言い切っているのである (Dreyfus (1982), 100) ²¹。

ドレイファスは同論で、フッサールは、表意作用に特徴的な「対象の实在に関係なく意味を理解できる」という性質を、知覚を含むあらゆる作用にも拡張していることを確認する²²。すなわち、あらゆる作用には、そこで志向されている対象が実在するかどうかとは関係なく、少なくとも何らかの意味が相関しているのであって、現象学というのは、「現象学的反省」によってそうした意味を取りだして研究する学なのである²³。

だが、ここで問題が生じてくるとドレイファスは考える。そのような拡張がなされるといことは、先に見たように、Sinn ないしノエマが Bedeutung ないし対象への通路をつけ

¹⁹ 同論でのフェレスダールは、フレーゲにかんしてはいわゆる「指示のシフト」について指摘しているが (cf. Føllesdal (1972), 420)、フッサールについてはそうした指摘はなされていない。他方で、Føllesdal (1969) においては、フッサールにそうした指示のシフトが見られないことが、フレーゲとフッサールの主たる違いだと指摘されている (cf. Føllesdal (1969), 686)。もっとも、フェレスダールのフッサール解釈は (半世紀以上の歴史をもつがゆえに当然ではあろうが)、つねに細部において一貫したものであるとは云えない。たとえば、Føllesdal (1982) においては、「指示のシフト」にもとづく A・チャーチの体系が、フッサール現象学の論理学的基礎としてふさわしいものだとされている (cf. Føllesdal (1982), 37)。実のところチャーチの議論は、フェレスダールにとって博士論文以来、「二種意味論」に訴えることなくクワインの批判を回避する有望な手立てのひとつだと見なされているのである (cf. Føllesdal (1961/2004), Appendix II)。それを踏まえれば、当時のフェレスダールにとってのフッサールは「一種意味論」をベースにしているが、しかしチャーチ的な手法で問題を回避できると考えられていたと云えよう。なお、近年のフェレスダールは、フッサールに「一種意味論」を帰することに否定的になっているように思われる (cf. Føllesdal (2006))。

²⁰ 注 12 で触れたように、D・W・スミスやマッキンタイアがフッサールに「単称主義」の要素を見とろうとしているのも、(両者が博士論文の指導を受けた) フェレスダールの問題意識ないしドレイファスによるその先鋭化を受けてのことだったと思われる。

²¹ こうしたドレイファスの解釈 (ならびに西岸解釈全般) は、しばしば大きな批判を浴びるものであるが、本稿ではドレイファスのフッサール解釈を評価することはしない (cf. Bell (1994), Drummond (1990), Zahavi (2004))。

²² Cf. Dreyfus (1982), 99.

²³ Cf. Dreyfus (1982), 101.

るといふ(一種意味論的な)発想を、知覚作用ないし充実作用一般に拡張することを意味している。そして、そのようにして知覚作用にも相関者としての意味(対象志向を可能にするもの)を認めると、知覚作用(充実作用)が「指示的に不透明」だということになってしまう。だが、「充実作用は、事態そのものを提示するというその機能のゆえに、通常の談話において指示的に不透明だと見なすことができないのである」(Dreyfus (1982), 103)。

もっともドレイファスは、実際のところフッサールも充実作用は直接的だと考えているのだと認めている。だが、そうであるためには、充実作用自体にふたつのフェーズを認めなければならなくなる。つまり、対象の实在と無関係に記述的な特定をなす作用と、対象を感性的に呈示する作用(これが前者の作用を充実したりしなかったりする)のふたつを区別できなければならないことになる²⁴。というのも、前者の要素が欠けてしまえば、充実が何の充実かわからなくなるからである²⁵。だが、このような区別ないし分離可能性を認めてしまえば、無限後退が避けられなくなるとドレイファスは考える。つまり、知覚作用そのものに「表意的な要素」と「直観的な要素」を認めてしまえば、当の「直観的な要素」のなかにも同様の区別を認めることが求められ、これがどこまでも続くことになる。

それゆえにドレイファスは、『論理学研究』のフッサールには、充実作用(知覚作用)の「指示的な透明性」や、対象ないし世界への直接的なアクセスを説明できないと主張するのである。

したがって、フッサールは自身の志向性観の一般性を守るために、外的直観の説明を放棄せざるをえなくなっている。フッサールは、知覚は指示的に不透明であると見なさざるをえず、与えられているものではなく、私たちがあると見なしているものに自身を制限せざるをえないのである(Dreyfus (1982), 108)。

こうした議論からドレイファスはさらに、この問題を前にしたフッサールが自身の志向性理論にとって忠実でありうる唯一の方途が、直接性や透明性の説明を放棄する「超越論的観念論」への転向だったのだと解釈する²⁶。それゆえ、ドレイファスからすれば、フッサールは『イデーニ I』にいたって、ある意味で「開き直す」ことで、自覚的に直接性や透明性を放棄しているのである(Dreyfus (1982), 108)。

かくして、ドレイファスによってフッサールは、「世界」とは独立した「心」に内在する表象的・命題的内容が、私たちの「心」と「世界」のアクセスを媒介するという「表象主義」を体現するものと解されていく。そして、そのような描像への強力な対抗者としてハイデガーがもちだされていくことになるのである。フェレスダールの言葉を借りれば、ドレイファスの構図はつぎのようなものになっていると云えよう。「一方では、表象の媒介によって主観が客観に関係するという、デカルトとフッサールの伝統的な認知主義的な観方があり、他方では、暗闇を引き裂いて物事を正しく見えるようにしてくれている人物、つまりハイデガーがいるのである」(Føllesdal (2000), 251)。

²⁴ Cf. Dreyfus (1982), 103.

²⁵ Cf. Dreyfus (1982), 103.

²⁶ Cf. Dreyfus (1982), 108.

3. 西海岸のハイデガー研究者 —— (フェレスダールから) ドレイファス

本章では、以上のような脈絡を踏まえたとき、ドレイファスのハイデガー解釈がどのように捉えられるかを示していくことにしたい。フェレスダールがフッサール研究における「西岸解釈」という派閥を形成したのと似たように、ドレイファスもまた、「西海岸のハイデガー研究者たち」と呼ばれるサークルを率いたとされる。そこにはT・カーマンやJ・ホーランド、W・ラサルらが含まれるが、本稿ではそれらの人物たちについては触れず、もっぱらドレイファスの解釈を扱うことにしたい。そして、それにあたって本稿が主として依拠するのは、ドレイファスがCh・スピノーザと1999年に共同で執筆した論文「物自体に対処する (Coping with Things-in-themselves)」である。

ドレイファスにはじまる一連のハイデガー解釈は「プラグマティスト的読解」とも云われ、前章末で見たような「表象主義」への強力な反抗から、しばしばまったく非言語的ないし前言語的な次元に依拠するものと解されている。ドレイファスが1991年のコメンタリー『世界内存在 (*Being-in-the-World*)』のなかで強調するのは、ハイデガーが伝統哲学における「明示性」の要求、つまり、実践的背景を(コンテクストを度外視して)第三者的・客観的に記述するという要求を受けつけていないということである²⁷。そして、そのような実践的背景やその分節化は「非(前)言語的なもの」として考えられているように見受けられる。「存在論的意味における語りは、言語的なものではなく、提示し語るべき何かを私たちに与えることで、言語を可能にするものなのである」(Dreyfus (1991), 216 f.)。だが、C・ラフォンがまさに指摘するように、「非明示的」から「非言語的」への推論はそのままで妥当するわけではない²⁸。また、かりに「非言語的」な領域を想定するのだとして、それがいかに「言語化」されるのかは問題になるように思われる²⁹。

本稿ではそうした問題に十全に対処することはできないが、ここで興味深いのは、スピノーザとの共著論文においては、日常性と非日常性における対象アクセスをめぐるハイデガーの分析が、言語的な指示と明白に結びつけて語られているということである。具体的には、ドレイファスは日常性の場面では記述主義的な発想を一定程度まで認めており、非日常的な場面では単称主義の発想を認めているのであって、しかもそのさい、フェレスダールの「純正単称名辞」が参照されているのである³⁰。こうしたドレイファスの議論を理解するには、それを本稿が示してきたような脈絡に置き入れる必要があるように思われる。

²⁷ Cf. Dreyfus (1991), 4.

²⁸ Cf. Lafont (2002), 238, Fn. 12.

²⁹ たとえばドレイファスは、ハイデガーにおける「有意義性 (significance)」は、伝統的な意味概念にもっとも近く、これは「必要であれば言語で」表現されると述べているが、それがどのようにして可能になるかは判明ではない (Dreyfus (1991), 224)。

³⁰ このことは、ドレイファス自身が、あっさりと「非(前)言語的なもの」に訴えることでよしとしていなかったことを示唆していると思われる。また、ハイデガーに全面的に記述主義を帰するラフォンに応答するにあたって、たとえばカーマンなどは、ある意味でプラグマティスト的な読解の「お手本」のように、非(前)言語的な次元に訴えている (Carman (2002))。しかし、これもまた示唆的なことに、ドレイファスはそういった応答は行わず、ハイデガーのなかに「直接指示」を見いだすことができると主張しているのである (Dreyfus (2002))。

前章で見たように、ドレイファスがフッサールに見てとっていた問題点は、『論理学研究』から『イデーニ I』にいたるまでのその思索のなかに、世界との直接的なアクセスを捉える術が欠けているということにあった。それを背景にすると、ドレイファスのハイデガー解釈は、ふたつの段階でそうした「直接的なアクセス」を見てとるものであると云える。ひとつは「実践的全体論」にもとづく「デフレ的実在論 (deflationary realism)」³¹であり、いまひとつは「頑強な実在論 (robust realism)」である。

一方で、前者の「デフレ的実在論」は、個別的な心に内在する表象的・命題的内容 (たとえばノエマ) の代わりに、共有された実践的ふるまいの背景を基盤に据えることによって、独立した「主観／客観」ないし「心／世界」という枠組みを失効させるものである。「デフレ的実在論を支持する議論は、人間存在は世界へと向けられた志向的内容をもつ自足的な心であるという、伝来のデカルト的な観方を拒絶することに依拠している」(Dreyfus & Spinoza (1999), 51)。つまり、私たちの「心」と「世界」という二項対立を立てたうえで、「ノエマ」や「表象的媒介」によって両者を架橋しようとする発想自体が無効化されているのであり、これによって私たちは、「心」と「世界」のあいだの全面的依存関係にかんする問いを立てることがなくなる。「デフレ的実在論」が機能する場面においては、「事物の全体は私たちの実践の全体から独立しうるのかとか、事物は私たちの実践から本質的に独立しているのか」といった問いは、私たちにとっては意味をなしえないのである」(Dreyfus & Spinoza (1999), 52)。かくしてドレイファスは、世界にかんする単一の正確な記述が存在しないということを認めながらも、それぞれの実践的・文化的共同体のなかで触れられる日常的な世界がそのまま「実在」なのだとする立場をとるのである。

ここで注目したいのは、同論でのドレイファスが、そうした日常性における「指示」は「記述」によって決定されるという観方をとっているということである。「日常的な指示はゆるく記述と呼びうるようなものの手を借りて生じている」(Dreyfus & Spinoza (1999), 64)。「日常性においては、一般名辞ないし種名辞がもつ記述的な意味 […] がその指示を定めるのが普通である」(Dreyfus & Spinoza (1999), 64)。こうした見解は、ここで云われている「ゆるさ」がどのようなものであるかは問題であるにせよ、ドレイファス自身も認めるように、「フレーゲの記述主義者の流れ」に与するものであると云える (Dreyfus & Spinoza (1999), 77, Fn. 54)³²。そのかぎりでは、「記述主義」ないし「一種意味論」という点だけにかんしては、ハイデガーの日常性分析とフッサールの知覚理論が一致すると云えるだろう。しかしながら、ドレイファスは上述のような発想から「実践的全体論」をとることによって、その場合でも直接的なアクセスが保持されると解釈しているのである。すなわち、いわず、Sinn が Bedeutung を決定するという意味論的な原理から観念論的な帰結が生じてく

³¹ ここで「実践的実在論」が「デフレ的」と呼ばれているのは、後述するように、そこにおいては「実践全体から独立した物自体の存在」と「物自体から本質的に独立した実践」のあいだでの「存在」をめぐる論争がデフレ化されているからである——「確かに、対象にかんする真なる言明は、私たちの実践にたいする対象の依存性も独立性も含意していないため、そういった言明は、「存在する」がもつ唯一の残された意味でそうした対象が存在するのを記述しているのだと理解せざるをえない——つまり、日常的な状況における「存在」である (Dreyfus & Spinoza (1999), 52)。

³² ドレイファスはそこで、「私たちにとって「記述的」と見なされるものが命題的である必要はないというのは明らかである」と述べている (Dreyfus & Spinoza (1999), 77, Fn. 54)。

るルートを、Sinn の存在論的な身分を改訂することで封殺しているのである。この件は(上述したように実践的背景と言語の関係が曖昧であることを措けば)、『世界内存在』でもつぎの箇所から窺えると思われる。

ハイデガーは、眼前的な心的内容としての(充足条件の)表象によって、言語がどうやって指示をなすのか説明できるということを拒絶する。ハイデガーは、判断が対象に関係するには、意味(Sinn)という方途によるのでなければならないということでフッサールに同意するが、フッサールと真っ向から対立することに、ハイデガーにとって意味というのは、行為や対象を理解可能にするさいの基礎となる共有された、実践の背景がもつ構造のことなのである(Dreyfus (1991), 268)。

他方で、後者の「頑強な実在論」は、上記のような「デフレ的実在論」を超えて、私たちのあらゆる実践から独立した宇宙ならびにそこへのアクセスを想定するものである。ここで問題になっているのは、異なる理論や実践的背景のあいだで同一の「宇宙(universe)」について語るという可能性であると思われる。ドレイファスは、実践的背景が機能している場合の「日常的な世界」と、それが失効したさいに姿をあらわす「宇宙」とを区別する³³。ドレイファスによれば、「不安」や「致命的な故障」などの「脱親密化(defamiliarization)」という現象によって、そうした「宇宙」は姿をあらわしてくる(Dreyfus & Spinoza (1999), 62)。そしてドレイファスは、双方にたいする存在了解が「非連続的な転換」をなしているということをもって、ハイデガーに「デフレ的実在論」以外の発想があると考えるのである³⁴。ドレイファスの見立てでは、「ハイデガーは日常的なものにかんするデフレ的実在論者の先駆けになっていながら、科学にかんする頑強な実在論を打ち立てようとしていたのである」(Dreyfus & Spinoza (1999), 50)。

こうした「宇宙」の想定は『世界内存在』にも見られるものであるが³⁵、ここではそうした「宇宙」へのアクセスについてもハイデガーのなかに資源が見いだされるようになっている。それは、「不安」や「致命的な故障」といった非日常的で「異他的な状況」で対象を指示するためのデバイスであり、ドレイファスは、初期ハイデガーが彫琢していた「形式的告示(formale Anzeige)」のことを、そのような「非コミット型の指示(non-committal reference)」として解釈するのである³⁶。

そうした指示は、存在者が本質的な性質をもちうることを認めると同時に、その存在者を指示するさいに私たちがつかう性質が、実のところどれも本質的ではないというような、そういう仕方存在者を指示することができるようなものである(Dreyfus & Spinoza (1999), 57)。

³³ Cf. Dreyfus & Spinoza (1999), 53.

³⁴ Cf. Dreyfus & Spinoza (1999), 54.

³⁵ Cf. Dreyfus (1991), Ch. 15.

³⁶ 本稿ではドレイファスの「形式的告示」解釈についての検討を施すことができない。ドレイファスの解釈にかんして、クリプキやフェレスダールの議論も踏まえて詳細に検討したものとして、神谷(2014)を参照せよ。

そしてドレイファスは、主として他でもなくフェレスダールの「純正単称名辞」を参照しつつ、こうした異他的な状況における指示が、クリプキやパトナム、ドネラン的な「直接指示」ないし「固定指示」なのだと主張するのである (Dreyfus & Spinoza (1999), 50, 63 f.)。

このように、フェレスダールらをベースにして直接指示的な発想が登場することは、プラグマティスト的読解の領袖としてのドレイファス像からすると、一見唐突にも映る。しかし、本稿が示してきたような脈絡を勘案するならば、この件は一定の理路のもとで理解することができると思われる。というのも、フェレスダールの「純正単称名辞」というのはもともと、伝統的な「一種意味論」がもつ問題を克服するために構築された「二種意味論」の中核的タームだったからである。そしてドレイファスは、自身のハイデガー解釈の基礎となり対決相手ともなるフッサールを解釈するさい、フッサールが（一種意味論的な発想の拡張にもとづいて）指示の透明性や世界への直接的アクセスを逸していると考えていたのだった。それゆえ、ここからつぎのように云うことができるだろう。すなわち、ドレイファスは、フェレスダールのフッサール解釈を引き受けたうえで生じるフッサールの問題ないし限界を、そのフェレスダールが「一種意味論」を超えるために提示した「二種意味論」に登場する「純正単称名辞」を活用することで、ハイデガー解釈のうちで克服しようと試みていたのである³⁷。

おわりに

本稿は、とくにアメリカ西海岸における分析哲学と現象学の交流を検討することで、フェレスダールとドレイファスを中心に、分析哲学における指示の問題とフッサール解釈、ハイデガー解釈が密接に結びついているということを示してきた。指示をめぐる「記述主義」と「単称主義」のあいだでの論争も、フッサール研究における「西岸解釈」ないし「フレーゲ的解釈」も、ハイデガー研究における「プラグマティスト的読解」も、どれもが各分野で大きな影響力をもってきた重要事項たちである。それらの三者が歴史的・内実的に絡み合っているということが示されたことで、分析哲学・フッサール研究・ハイデガー研究をこの点で結びあわせて比較・検討する道が拓けるのではないだろうか。

最後にそうした比較・検討の可能性について簡潔に触れるなら、ひとつの有望なトピックは「指標辞 (indexicals)」になるだろう。「指標辞」をめぐる問題は、分析哲学において伝統的な「記述主義」を突破する「単称主義」において重要視されるものであると同時に³⁸、フッサール研究においても (『論理学研究』における「本質的に偶因的な表現 (die wesentlich okkasionellen Ausdrücke)」の分析をベースにして) 積極的に論じられるものでもある³⁹。そ

³⁷ もっとも、フェレスダール本人は、博士論文提出後に「純正単称名辞」をブラッシュアップして自身の「指示の規範説」を彫琢するさい、ハイデガーではなくフッサールに依拠していると思われる (cf. Føllesdal (1986), Føllesdal (1997))。

³⁸ Cf. Kaplan (1989).

³⁹ Cf. Philipse (1982), D. W. Smith (1982), Mulligan & B. Smith (1986), Schuhmann (1993).

して重要なことに、初期ハイデガーの「形式的告示」という方法は、まさにその「本質的に偶因的な表現」の影響を受けたものであることが指摘されているのである⁴⁰。

その点で、ドレイファスが「形式的告示」に着目していることは炯眼であると云える。しかしドレイファスは、「形式的告示」を解釈するさい、指標辞からアプローチしているわけではない。それゆえ、ドレイファスの考えでは「記述主義」が通用しない「不安」などのような「異他的な状況」におけるアクセスにおいて「意味」がどのような役割を果たすのかが明白になっていないと思われる。つまり、ドレイファスにおいては、そうした状況における「意味」の参与は本質的ではないようにも見えるのである。だが、むしろハイデガーは、「本質的に偶因的な表現」を批判的に受容しつつ、さらにフッサールの「形式化 (Formalisierung)」と「類化 (Generalisierung)」の区別にも訴えることで、「類概念の理論的・概念的・一般性」に訴えないような「意味」や「対象アクセス」を考えようとしていたと思われる⁴¹。それゆえ、こうした点をさらに考究していけば、ハイデガーの思想にたいして、分析哲学ならびにフッサール研究との関連で新たな光を投げかけ、「存在 (Sein)」や「意味 (Sinn)」といったハイデガーの根本概念間の関係⁴²にも新たな光を投げかけることができるのではないだろうか⁴³。

文献表

○ M・ハイデガーの著作

慣例にのっとり、『存在と時間』については略号 SZ の後にページ数を、『ハイデガー全集』 (Gesamtausgabe) については略号 GA の後に巻号とページ数をアラビア数字で記す。適宜邦訳を参照したものの、本稿中における引用はすべて筆者によるものである。

- ・ SZ *Sein und Zeit*, 19. Aufl., Frankfurt a. M.: Max Niemeyer, 2006.
- ・ GA 56/57 *Zur Bestimmung der Philosophie*, hrsg. v. B. Heimbüchel, 1987.

○ その他著作

著者の姓の後にパーレンで年号を付したううえで、ページ数をアラビア数字で記して引用する (複数ページにわたるさいは「f.」ないし「ff.」を付記する)。ただし、序論など原テキストでローマ数字になっている箇所はローマ数字で記すほか、章数は「Ch.」のあとに、脚注は「Fn.」の後に番

⁴⁰ Kisiel (1993), 齋藤 (2012), 田村 (2013), 若見 (2004), 若見 (2007). また、フッサールの議論と詳細に比較・検討した有益な研究として、神谷 (2010), 酒詰 (2018) を参照せよ。

⁴¹ Cf. GA 56/57, 111. また、『存在と時間』における以下の箇所も示唆的である。「哲学の根本主題としての存在は、何らかの存在者の類ではないが、それでもどんな存在者にもかかわっている。その一般性 (Universalität) は、より高いところに求められなければならない。存在と存在構造は、どのような存在者も、あるいは、ある存在者をもつそれ自体存在しうようなどんな規定も超えたところにある。存在は端的な超越範疇なのである。現存在の存在をもつ超越は、そこにもっとも徹底的な個別化の可能性と必然性があるというかぎり、際立った超越である」 (SZ, 38)。

⁴² とりわけ『存在と時間』において、「理解」されるものは、厳密には「意味 (Sinn)」ではなく「存在者」ないし「存在」とされている箇所などは、集中した解釈が必要になるだろう (SZ, 151)。

⁴³ 本稿は「第 17 回ハイデガー・フォーラム」での発表原稿を大幅に加筆・修正したものである。大会の場でさまざまな指摘をしてくださった皆様方には、深く御礼申し上げたい。また、本稿は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2123 の支援を受けたものである。そちらのご支援にも感謝申し上げたい。

号をアラビア数字で記す。中略は […] であらわすほか、[] で付した語は引用者による挿入である。

- 荒畑 靖宏 (2009a) : 『世界内存在の解釈学 ——ハイデガー「心の哲学」と「言語哲学」』、春風社。
- —— (2009b): 「脱自としての心的生 ——ハイデガーとマクダウエルの「特異」な外在主義」、『成城文藝』(206)、103-126 ページ。
- Bell, David (1994): “Reference, Experience, and Intentionality,” in: L. Haaparanta (ed.), *Mind, Meaning and Mathematics: Essays on the Philosophical Views of Husserl and Frege*, Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Press, pp. 185-209.
- Beyer, Christian (2000): *Intentionalität und Referenz: Eine sprachanalytische Studie zu Husserls transzendentaler Phänomenologie*, Paderborn: Mentis.
- Carman, Taylor (2002): “Was Heidegger a Linguistic Idealist?,” *Inquiry*, Vol. 45, pp. 205-216.
- Devitt, Michael (1989): “Against Direct Reference,” *Midwest Studies in Philosophy*, Vol. 14, pp. 206-240.
- Dreyfus, Hubert (1982); “Husserl’s Perceptual Noema,” in: H. Dreyfus & H. Hall (eds.), *Husserl, Intentionality, and Cognitive Science*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, pp. 97-123.
- —— (1991): *Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger’s Being and Time, Division I*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- —— (2002): “Comments on Cristina Lafont’s Interpretation of *Being and Time*,” *Inquiry*, Vol. 45, pp. 191-194.
- Dreyfus, Hubert & Spinoza, Charles (1999): “Coping with Things-in-themselves: A Practice-Based Phenomenological Argument for Realism,” *Inquiry*, Vol. 41, pp. 49-78.
- Drummond, John (1990): *Husserlian Intentionality and Non-Foundational Realism*, Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Press.
- Dummett, Michael (1993): *Origins of Analytical Philosophy*, London: Bloomsbury Academic.
- Føllesdal, Dagfinn (1968): “Quine on Modality,” *Synthese*, Vol. 19, 1968, pp. 147-157.
- —— (1994): “Husserl and Frege: a contribution to elucidating the origins of phenomenological philosophy,” translated by C. Hill, in: L. Haaparanta (ed.), *Mind, Meaning and Mathematics: Essays on the Philosophical Views of Husserl and Frege*, Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Press, 1994, pp. 3-47.
- —— (1961/2004): *Referential Opacity and Modal Logic*, London/New York : Routledge, 2004. [Originally: Dissertation, Harvard, 1961.]
- —— (1969): “Husserl’s Notion of Noema,” *The Journal of Philosophy*, Vol. 66, pp. 680-687.
- —— (1972): “An Introduction to Phenomenology for Analytic Philosophers,” in: R. Olson & A. Paul (eds.), *Contemporary Philosophy in Scandinavia*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, pp. 417-429.
- —— (1982): “Brentano and Husserl on Intentional Objects and Perception,” in: H. Dreyfus & H. Hall (eds.), *Husserl, Intentionality, and Cognitive Science*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, pp. 31-42.
- —— (1986) : “Essentialism and Reference,” in: L. Hahn & P. Schilpp (eds.), *The Philosophy of W. V. Quine (Expanded Edition)*, La Salle: Open Court, pp. 97-113.
- —— (1997): “Conceptual Change and Reference,” in: C. Hubig (ed.), *Cognitio Humana-Dynamik des Wissens und der Werte, XVII. Deutscher Kongress für Philosophie, Leipzig, 23-27 September 1996, Vorträge und Kolloquien*, Berlin: Akademie Verlag, pp. 351-367.
- —— (2000): “Absorbed Coping, Husserl, and Heidegger,” in: J. Malpas & M. Wrathall (eds.), *Heidegger, Authenticity, and Modernity: Essay in Honour of Hubert L. Dreyfus*. Cambridge, Mass.; The MIT Press, pp. 251-257.
- —— (2006): “Indikatoren und der Geist,” translated by G. Keil, in: G. Keil & U. Tietz (eds.), *Phänomenologie und Sprachanalyse*, Paderborn: Mentis, pp. 227-232.
- 飯田 隆 (1995): 『言語哲学大全 (III)』、勁草書房。
- 神谷 健 (2010): 『初期ハイデガーに於ける哲学の定義の問題』(修士論文、慶應義塾大学)。
- —— (2014): 「形式的告示と固定指示子 ——ハイデガーの实在論的一解釈を巡って」、日本現象学会第 36 回研究大会 (口頭発表)

- Kaplan, David (1989): “Demonstratives: An Essay on the Semantics, Logic, Metaphysics, and Epistemology of Demonstratives and Other Indexicals,” in: J. Almog, J. Perry & H. Wettstein (eds.), *Themes from Kaplan*, Oxford: Oxford University Press, pp. 481-563.
- Kisiel, Theodore (1993): *The Genesis of Heidegger’s Being and Time*, Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press.
- Kripke, Saul (1980): *Naming and Necessity*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Lafont, Cristina (2002): “Replies,” *Inquiry*, Vol. 45, pp. 229-248.
- Lycan, William (1999): *Philosophy of Language: A Contemporary Introduction*, London/New York: Routledge.
- McIntyre, Ronald (1982): “Intending and Referring,” in: H. Dreyfus & H. Hall (eds.), *Husserl, Intentionality, and Cognitive Science*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, pp. 215-231.
- Mulligan, Kevin & Smith, Barry (1986): “A Husserlian Theory of Indexicality,” in: *Grazer Philosophische Studien*, Vol. 28, pp. 133-63.
- 成瀬 翔 (2015): 「ノエマと心的ファイル」、『フッサール研究』(12)、1-15 ページ。
- —— (2016): 「新フレーゲ主義と単称主義」、『日本福祉大学全学教育センター紀要』(4)、21-30 ページ。
- Philipse, Herman (1982): “The Problem of Occasional Expressions in Edmund Husserl’s *Logical Investigations*,” *Journal of the British Society for Phenomenology*, Vol. 14, pp. 168-185.
- Quine, Willard van Orman (1980): *From a Logical Point of View: 9 Logico-Philosophical Essays* (2nd Edition, Revised), Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Recanati, François (2012) *Mental File*, Oxford: Oxford University Press.
- 齋藤 元紀 (2012): 『存在の解釈学 ——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』、法政大学出版局。
- 酒詰 悠太 (2018): 『ハイデガー哲学における歴史理解 ——所与性の再経験としての歴史』(博士論文、京都大学)。
- Schuhmann, Karl (1993): “Husserl’s Theory of Indexicals,” in: F. Kirkland & D. Chattopadhyaya (eds.), *Phenomenology: East and West*, Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Press, pp. 111-127.
- Searle, John (1958): “Proper Names,” *Mind*, Vol. 67, pp. 166-173.
- Smith, David Woodruff (1981): “Indexical Sense and Reference,” *Synthese*, Vol. 49, pp. 101-127.
- —— (1982): “Husserl on Demonstrative Reference and Perception,” in: H. Dreyfus & H. Hall (eds.), *Husserl, Intentionality, and Cognitive Science*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, pp. 193-213.
- Smith, David Woodruff & McIntyre, Ronald (1982): *Husserl and Intentionality: A Study of Mind, Meaning, and Language*, Dordrecht/Boston/Lancaster: D. Reidel.
- 田村 未希 (2013): 「前期ハイデガーの方法概念 ——初期フライブルク講義における「歴史性を理解する」という課題と方法論的形成について」、『現象学年報』(29)、133-140 ページ。
- 若見 理江 (2004): 「ハイデガーの現象学的還元」、『現象学年報』(20)、159-166 ページ。
- —— (2007): 「ハイデガーにおける形式的告示の形成過程」、『大谷学報』(86)、18-36 ページ。
- Yoshimi, Jeffrey, Tolley, Clinton & Smith, David Woodruff (2019): “California Phenomenology,” in: M. Ferri & C. Ierna (eds.), *The Reception of Husserlian Phenomenology in North America*, Springer, pp. 365-387.
- Zahavi, Dan (2004): “Husserl’s Noema and the Internalism-Externalism Debate,” *Inquiry*, Vol. 47, pp. 42-66.